

1

地元を研究し 再びルーツにつながる

カルロ・アントニオ・ガライ・ダビッド

故郷の人間であるということは、どういう意味をもつのでしょうか。

僕は、カルロ・アントニオ・ガライ・ダビッドです。文学者、郷土史家、文化・芸術擁護者としての僕のキャリアは、この問いに答えようとする、長く、時に難しい旅のようなものです。

僕の仕事

僕の仕事は、フィリピン南部ミンダナオ島にある故郷のキダパワン市を中心に回っています。僕の家族は5世代にわたってこの町に住んできました。

ここでの僕の仕事の大半は、郷土史家としての仕事です。2017年、自治体からの依頼で、キダパワンの歴史を書きました。この仕事では、これまで記録されていなかった生活や事件を記録するだけでなく、とくに地元の人びとの間で、町の過去に対する認識と評価を高める必要がありました。



キダパワン市役所前でモロと先住民の若者たちの聴衆を前に講演を行う。マルコス時代の残虐行為であるパガオの虐殺について、この街で初めて公に言及した。

歴史の記録だけにとどまらず、長い間放置されてきた町の遺産にも目を向け、町の文化地図作りを支援する研究では、郷土料理（特に先住民族オボ・マノボの料理）、文学、視覚芸術などを主に扱ってきました。

ほかに、自治体と密接に連携し、特に観光局や文化芸術評議会に対して、文化芸術政策の立案に関するアドバイスや技術支援を行うことも多いです。

ここまで紹介してきたような地元での活動は、小説家・劇作家でもある僕の文学作品をより豊かにしてくれます。実際、僕が創る物語や劇の大部分は、この町の人間の複雑な現実を反映したものとなっています。

ダバオでキダパワンを発見する

実はリモートでこれらの仕事をしています。つまり、仕事そのものはキダパワンに存在するわけですが、そこからバスで2時間ほどの距離にあるダバオ市が僕の拠点です。僕の家族がここに移り住んでから、もう10年以上が経ちます。

僕が幼い頃に両親が離婚し、母はシングル・ペアレントとして僕と弟を育てなければなりませんでした。

キダパワンのあちこちの家に転がり込むことになり、そのため、僕は定住する家というものを知らずに育ちました。ダバオに引っ越すことになり、その傾向はいっそう強くなりました。

こうして育った僕は、ある場所から根こそぎ引き抜かれるように感じたことがありませんでした。総じてキダパワンの人びとは「家」や「帰属」といった概念についてあまり考えません。フィリピン人としての僕は、運命はいつもここではない別のところにあり、自分の人生を生きるためには、いまいる場所を離れなければならないと思って育ってきました。

ダバオに移り住んだことで、それまで当たり前だと思っていたキダパワンの魅力に気づくことができたのです。

ダバオ市は、キダパワンとはまったく異なる文化を持っています。ダバオには、より多くの作家、芸術家、知識人がいて、僕が帰属意識を抱けるコミュニティがありました。そして、そのコミュニティで非常に強いイデオロギーのひとつが、ローカライゼーション、つまり、地元にあるすべてのものを称賛することだったのです。僕の学んだアテネオ・デ・ダバオ大学の作家や学者たちは、自分たちの身近な場所を研究したり扱ったりすることを支持・擁護していました。

ダバオに引っ越したことがきっかけで、私はキダパワンに関心を持つようになりました。やがて、僕はキダパワンの町についての小説を書くようになったのです。

ただし、キダパワンについて考え始めたとはいえ、その時点ではまだ、それが運命に導かれた自らの目的地であるとわかっていただけではありません。

大学卒業後、僕はさまざまな学校で文学、研究などを教えていました。フィリピン中部にあるドゥマゲテ市に移り住み、文芸創作を専門に学ぶため、シリマン大学で修士号を取得しました。

あるとき、教えることに疲れ、自分がなぜこの仕事をしているのかがわからなくなっていました。そして、一歩下がって考えてみる必要があると気づきました。

インレー湖に落下する

そのようなとき、アテネオ・デ・ダバオ大学が、卒業生をボランティアとしてミャンマーに派遣する「カルドナー・ボランティア・プログラム」を始めたことがよい機会になりました。

僕はその第一陣として登録し、ミャンマー・シャン州の州都であるタウンジーで教鞭をとることになったのです。

しかし、ボランティアで教えるうちに、教えることへの意欲を失っていることに気づかされました。

無気力になった私は、SNSでフィリピンの近況を知るようになりました。そのおかげで、キダパワンのニュースもキャッチできました。

受け入れ先の学校では、僕たちボランティアを日帰りで近隣の観光地へ連れて行ってくれることもありました。

そのひとつが、ミャンマー有数の観光地であるインレー湖です。インレーには何度か行きましたが、あるとき一緒に行った生徒のひとりが、ハウン・ダオ・ウー寺院の仏像の伝説について話してくれました。

毎年、この古刹の祭りの時期になると、有名な5体の仏像のうち4体が湖周辺のさまざまな町に運ばれます。

しかし、1体は常に寺院に安置されたままです。その理由を生徒が教えてくれません。

かつて5体の仏像全部が運ばれたとき、船が転覆して仏像が湖に落ちてしまいました。しかし、4体は見つかったものの、後の1体が見つかりませんでした。

祭りは中止となり、生き残った4体の仏像は寺に持ち帰られました。

しかし誰もが驚いたことに、行方不明の仏像は祭壇の上に、まるで一度もそこを離れたことなどないかのように祭壇にあったというのです。

それ以来、その仏像は一度も寺院から持ち出されたことがありません。

インレー湖には、人を元の場所に連れ戻す力があるのだ、とその学生は話を結びました。

湖を渡るボートの上でこの話を考えながら、もし自分が水に落ちたらどうなるのだろうかと言談めかして考えていました。

そのとき、とつぜん天啓を得たのです。もしかしたら、僕はこの話を聞いた最初のキダパワン人かもしれない。ここインレーでも、タウンジーでも、シャン州でも、もしかしたらミャンマー全体でも、僕自身が行なった多くのものごとにおいて、僕はそれをした最初のキダパワン人だったのかもしれない。つまり、僕はキダパワンを連れて、こうした場所に出かけ、人生の節目に出会っていたと気づいたのです。

僕はキダパワンを離れたことはなかったのです。僕自身がキダパワンだったからです。

僕は曾祖父たちが築き上げたこの町の一部だったのです。

コミュニティは単なる場所ではなく、そこに住む人びとであり、その人びとの運命がそのコミュニティの運命なのです。そして、その運命づくりに参加するために、僕は戻らなければなりませんでした。

その後、私はキダパワンの自治体に関わり、この町のために働く必要があると考えました。それからが、文字通りキダパワンの歴史なのです。



インレー湖の上を飛ぶタンチョウ。
天啓を得る直前に筆者撮影。

反骨精神

フィリピンのキダパワンのような町で、地元の歴史、文化、遺産について書くのは容易なことではありません。一般市民のこうした活動への関心の薄さに対処しなければならぬし、多くの場合、長年にわたって信じられてきた思い込みを否定したり、長年にわたって確立されてきた悪習を覆す手助けをしたりしなければならぬのです。

僕はいろいろな点で自分がなそうとすることをなすのに理想的な状況にありました。好奇心旺盛な僕は、権威に疑問を抱きながら育ちましたし、文学や学問のキャリアを積んでいくうちに、論客という評判を得るようになりました。

印象に残っているのは、地元のラジオ局で、僕が発見した歴史的な誤りについて議論をしたことです。キダパワンの学校では長い間、この町はピキットというさらに古い町の一部であると教えられてきました。僕は、ピキットがキダパワンより歴史が浅く、キダパワンがピキットの一部であった証拠はないことを突き止めたのです。すると、地元のラジオのコメンテーターが学校で習ったことを主張して反発し、僕たちは活発な議論をしました。

キダパワンのような「歴史に」関心の薄い町では、論争が意識を高めるのに有効なのです。

地元に影響を与えることを通じて再びつながる

この仕事を通じて、キダパワンの年配の方や若い世代と深いつながりを持つようになることも少なくありません。

年配の方へのインタビューを通じて、故郷の過去を垣間見ることができただけでなく、昔からの家族の絆を再認識することができました。

先住民族の人びととのつながりもでき、今では何人かを友人といえるようになりました。

また、文化や歴史に対する認識を高めることで、町の若い世代と触れ合うことができました。親世代が当たり前だと思っていたことに若者が関心を持つ姿を目の当たりにして、とても充実した気持ちになりました。

いつの間にか、自分が去った街の記憶や想像力として、欠かせない役割を担うようになっていたのです。

(訳：青山和佳)



母校であるノートルダム・キダバワン大学の司書と、同校の古い年鑑、市内で最も古い資料のいくつかを前に立つ筆者（写真右側）。